

新規指定の重要文化財（建造物）

名 称	こうみょうじ 光明寺	棟 数	8 棟
所 在 地	京都府長岡京市栗生西条内		
所 有 者	宗教法人 光明寺		
指定基準	(一) 意匠的に優秀なもの (三) 歴史的価値の高いもの		
建 物 名	員数	構 造 形 式	建 設 年 代
ほんどう (みえどう) 本堂 (御影堂)	1 棟	桁行 7 間、梁間 7 間、一重、入母屋造、向拝 3 間、本瓦葺 附・宮殿 1 基 桁行 1 間、梁間 2 間、入母屋造、正面千鳥破風及び軒唐破風付、板葺 ・渡廊下 1 棟 桁行折曲り 13 間、梁間 1 間、一重、切妻造、棧瓦葺	宝暦 3 年 (1753)
あみだどう 阿弥陀堂	1 棟	桁行 3 間、梁間 4 間、一重、入母屋造、向拝 1 間、背面軒下張出附属、本瓦葺	寛政 11 年 (1799)
しゃかどう 釈迦堂	1 棟	桁行 19.0 メートル、梁間 14.9 メートル、一重、入母屋造、棧瓦葺	元文 3 年 (1738) ～ 寛保元年 (1742)
ちよくしもん 勅使門	1 棟	四脚門、切妻造、前後唐破風造、檜皮葺 附・築地塀 2 棟 北方及び南方 各折曲り延長 9.7 メートル、本瓦葺	文久元年 (1861)
ごほんびよう 御本廟 及び ごほんびようはいでん 御本廟 拝殿	2 棟	御本廟 正面 1 間、側背面 2 間、一重、宝形造、檜皮葺 御本廟拝殿 桁行 3 間、梁間 2 間、一重、入母屋造、向拝 1 間、向唐破風造、背面歩廊附属、桁行 2 間、梁間 1 間、向唐破風造、檜皮葺、御本廟繫塀附属 附・五重塔 1 基 石造五重塔 ・御本廟門 1 棟 石造及び木造、一間平唐門、檜皮葺	御本廟 明暦 2 年 (1656) 御本廟拝殿 明暦 3 年 (1657)

		・御本廟石柵 1 所 折曲り延長 31.9 メートル ・御本廟拝殿石柵 2 所 御本廟門北方及び南方 各折曲り延長 23.3 メートル	
しょうろう 鐘楼	1 棟	桁行 1 間、梁間 1 間、一重、切妻造、本瓦葺	明暦 3 年 (1657)
そうもん 総門	1 棟	一間高麗門、本瓦葺 附・築地塀 2 棟 北方及び南方 各折曲り延長 7.2 メートル、本瓦葺、 南方戸口 1 所付	弘化 2 年 (1845)
		附・中門 ^{ちゅうもん} 1 棟 一間薬医門、切妻造、本瓦葺	

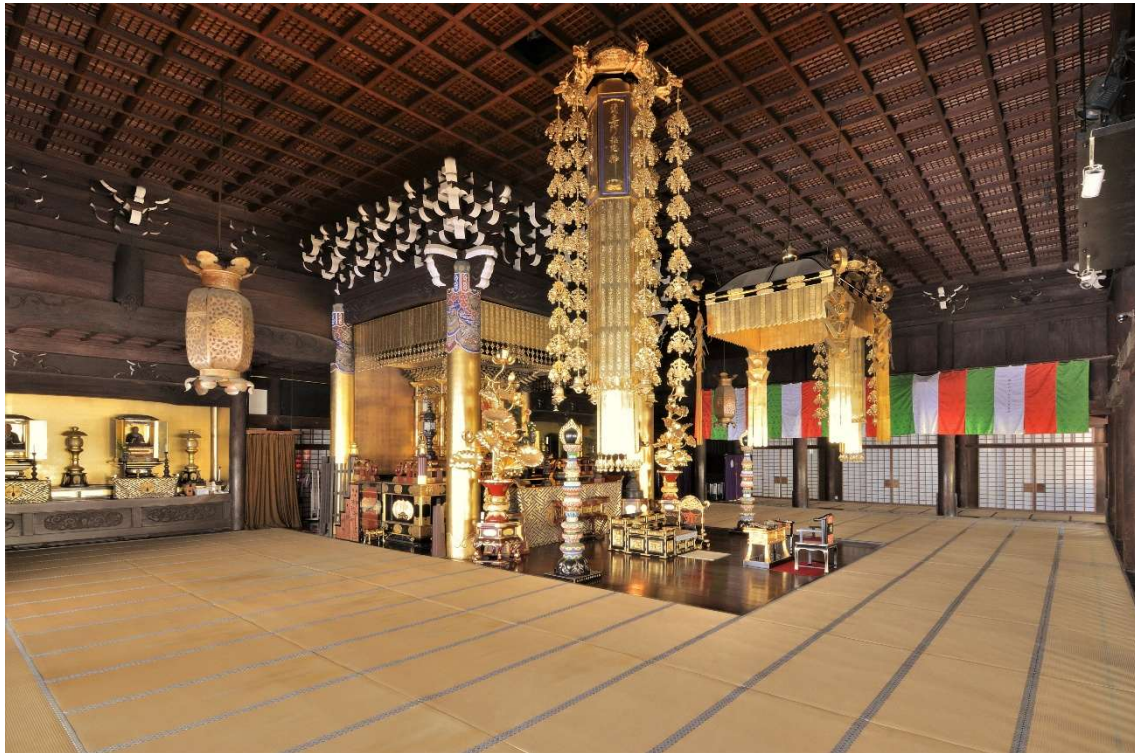
〔解説〕

一近世浄土宗寺院建築の展開を知る上で貴重な堂舎群一

光明寺は、長岡京市の西山東麓^{にしやま}に境内を構える、西山浄土宗^{せいざんじょうとしゅう}の総本山寺院である。建久九年（1198）に熊谷直実が法然を開祖として創立した念仏三昧院を前身とし、安貞 2 年（1228）には当地において法然の遺骸を茶毘に付し、廟堂を造立した。その後、相次ぐ戦乱や火災により被災と再建を繰り返したが、その都度再興された歴史を持つ。本堂は、宝暦 3 年（1753）に上棟された大型七間堂で、内外陣境の金剛柵^{こんごうさく}のほかは内部に区画がなく、浄土宗寺院本堂が開放的かつ融通性に富む平面へと変遷する上で、最初期の事例となった建造物である。彫刻等の細部装飾も豊富ながら華美になり過ぎず、良材を用いた質の高い仏堂である。18 世紀半ばにおける京都洛中の大工と地元洛西の大工の合作である。阿弥陀堂は、^{いっけんしめんどう}一間四面堂を彷彿とさせる形式で、浄土宗寺院における阿弥陀堂としては独自の特徴を有し、地元大工の代表作と言える。釈迦堂は食違^{むつまどり}い六間取平面で、浄土宗西山派の方丈の間取りを伝える。御本廟は 17 世紀半ばの京都近辺の建造物としては珍しく多彩な建築彫刻が施され、府内の同系統の廟と比しても装飾性が際立つ。境内には、さらに鐘楼、総門などの建物が並び立ち、江戸時代中期以降に復興を遂げた境内の様相を現在に伝え、歴史的価値が高い。



重要文化財 光明寺 本堂（御影堂） 外観



重要文化財 光明寺 本堂（御影堂） 内観



重要文化財 光明寺 御本廟及び御本廟拝殿 外観



重要文化財 光明寺 釈迦堂 外観